

医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会のIF記載要領 2018(2019 年更新版)に準拠して作成

非ステロイド性消炎・鎮痛剤(COX-2 選択的阻害剤)

セレコキシブ錠 100mg「YD」

セレコキシブ錠 200mg「YD」

セレコキシブ錠

CELEKOXIB TABLETS

剤形	素錠	
製剤の規制区分	劇薬、処方箋医薬品	
規格・含量	錠 100 mg:1錠中、セレコキシブ 100mg 含有 錠 200 mg:1錠中、セレコキシブ 200mg 含有	
一般名	和名:セレコキシブ(JAN) 洋名:Celecoxib(JAN)	
製造販売承認年月日 薬価基準収載年月日 発売年月日	製造販売承認年月日	2020 年 2 月 17 日
	薬価基準収載年月日	2020 年 6 月 19 日
	発売年月日	2020 年 6 月 19 日
開発・製造販売(輸入)・ 提携・販売会社名	製造販売元:陽進堂ホールディングス株式会社	
医薬情報担当者の連絡先		
問い合わせ窓口	陽進堂ホールディングス株式会社 お客様相談室 0120-647-734 医療関係者向けホームページ https://yoshindoholdings.co.jp/	

本 IF は 2024 年 10 月作成(第 2 版)の電子文書の記載に基づき作成した。最新の情報は医薬品医療機器情報提供ホームページ <https://www.pmda.go.jp/> にてご確認下さい。

医薬品インタビューフォーム利用の手引きの概要 ―日本病院薬剤師会―

(2020年4月改訂)

1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として、医療用医薬品添付文書（以下、添付文書）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合があり、製薬企業の医薬情報担当者（以下、MR）等への情報の追加請求や質疑により情報を補完してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための項目リストとして医薬品インタビューフォーム（以下、I Fと略す）が誕生した。

1988年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬）学術第2小委員会がI Fの位置付け、I F記載様式、I F記載要領を策定し、その後1998年に日病薬学術第3小委員会が、2008年、2013年に日病薬医薬情報委員会がI F記載要領の改訂を行ってきた。

I F記載要領2008以降、I FはPDF等の電子的データとして提供することが原則となった。これにより、添付文書の主要な改訂があった場合に改訂の根拠データを追加したI Fが速やかに提供されることとなった。最新版のI Fは、医薬品医療機器総合機構（以下、PMDA）の医療用医薬品情報検索のページ（<http://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>）にて公開されている。日病薬では、2009年より新医薬品のI Fの情報を検討する組織として「インタビューフォーム検討会」を設置し、個々のI Fが添付文書を補完する適正使用情報として適切に審査・検討している。

2019年の添付文書記載要領の変更に合わせ、「I F記載要領2018」が公表され、今般「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドライン」に関連する情報整備のため、その更新版を策定した。

2. I Fとは

I Fは「添付文書等の情報を補完し、医師・薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

I Fに記載する項目配列は日病薬が策定したI F記載要領に準拠し、一部の例外を除き承認の範囲内の情報が記載される。ただし、製薬企業の機密等に関わるもの及び利用者自らが評価・判断・提供すべき事項等はI Fの記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供されたI Fは、利用者自らが評価・判断・臨床適用するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。I Fの提供は電子データを基本とし、製薬企業での製本は必須ではない。

3. I Fの利用にあたって

電子媒体のI Fは、PMDAの医療用医薬品情報検索のページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従ってI Fを作成・提供するが、I Fの原点を踏まえ、医療現場に不足している情報やI F作成時に記載し難い情報等については製薬企業のMR等へのインタビューにより利用者自らが内容を充実させ、I Fの利用性を高める必要がある。

また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、I Fが改訂されるまでの間は、製薬

企業が提供する改訂内容を明らかにした文書等，あるいは各種の医薬品情報提供サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに，I Fの使用にあたっては，最新の添付文書をPMD Aの医薬品医療機器情報検索のページで確認する必要がある。

なお，適正使用や安全性の確保の点から記載されている「V. 5. 臨床成績」や「XII. 参考資料」，「XIII. 備考」に関する項目等は承認を受けていない情報が含まれることがあり，その取り扱いには十分留意すべきである。

4. 利用に際しての留意点

I Fを日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用していただきたい。I Fは日病薬の要請を受けて，当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業が作成・提供する，医薬品適正使用のための学術資料であるとの位置づけだが，記載・表現には医薬品，医療機器等の品質，有効性及び安全性の確保等に関する法律の広告規則や販売情報提供活動ガイドライン，製薬協コード・オブ・プラクティス等の制約を一定程度受けざるを得ない。販売情報提供活動ガイドラインでは，未承認薬や承認外の用法等に関する情報提供について，製薬企業が医療従事者からの求めに応じて行うことは差し支えないとされており，MR等へのインタビューや自らの文献調査などにより，利用者自らがI Fの内容を充実させるべきものであることを認識しておかなければならない。製薬企業から得られる情報の科学的根拠を確認し，その客観性を見抜き，医療現場における適正使用を確保することは薬剤師の本務であり，I Fを利用して日常業務を更に価値あるものにしていただきたい。

目 次

I. 概要に関する項目	1	V Ⅲ. 安全性（使用上の注意等）に関する項目	27
1. 開発の経緯	1	1. 警告内容とその理由	27
2. 製品の治療学的特性	1	2. 禁忌内容とその理由	27
3. 製品の製剤学的特性	1	3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由	27
4. 適正使用に関して周知すべき特性	2	4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由	27
5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項	2	5. 重要な基本的注意とその理由	28
6. RMP の概要	2	6. 特定の背景を有する患者に関する注意	29
II. 名称に関する項目	3	7. 相互作用	30
1. 販売名	3	8. 副作用	32
2. 一般名	3	9. 臨床検査結果に及ぼす影響	35
3. 構造式又は示性式	3	10. 過量投与	35
4. 分子式及び分子量	3	11. 適用上の注意	35
5. 化学名（命名法）	3	12. その他の注意	35
6. 慣用名、別名、略号、記号番号	3	I X. 非臨床試験に関する項目	36
III. 有効成分に関する項目	4	1. 薬理試験	36
1. 物理化学的性質	4	2. 毒性試験	36
2. 有効成分の各種条件下における安定性	4	X. 管理的事項に関する項目	37
3. 有効成分の確認試験法、定量法	4	1. 規制区分	37
I V. 製剤に関する項目	5	2. 有効期間	37
1. 剤形	5	3. 包装状態での貯法	37
2. 製剤の組成	5	4. 取扱い上の注意	37
3. 添付溶解液の組成及び容量	6	5. 患者向け資材	37
4. 力価	6	6. 同一成分・同効薬	37
5. 混入する可能性のある夾雑物	6	7. 国際誕生年月日	37
6. 製剤の各種条件下における安定性	6	8. 製造販売承認年月及び承認番号、薬価収載年月日、販売開始年月日	37
7. 調製法及び溶解後の安定性	7	9. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその容用	38
8. 他剤との配合変化（物理化学的変化）	7	10. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容	38
9. 溶出性	7	11. 再審査期間	38
10. 容器・包装	11	12. 投薬期間制限に関する情報	38
11. 別途提供される資材類	11	13. 各種コード	38
12. その他	11	14. 保険給付上の注意	38
V. 治療に関する項目	12	X I. 文献	39
1. 効能又は効果	12	1. 引用文献	39
2. 効能又は効果に関連する使用上の注意	12	2. その他の参考文献	41
3. 用法及び用量	12	X II. 参考資料	42
4. 用法及び用量に関連する使用上の注意	12	1. 主な外国での発売状況	42
5. 臨床試験	13	2. 海外における臨床支援情報	42
V I. 薬効薬理に関する項目	18	X III. 備考	43
1. 薬理学的に関連ある化合物又は化合物群	18	1. 調剤服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報	43
2. 薬理作用	18	2. その他の資料	43
V II. 薬物動態に関する項目	20		
1. 血中濃度の推移	20		
2. 薬物速度論的パラメータ	23		
3. 母集団（ポピュレーション）解析	24		
4. 吸収	24		
5. 分布	24		
6. 代謝	24		
7. 排泄	25		
8. トランスポーターに関する情報	26		
9. 透析等による除去率	26		
10. 特定の背景を有する患者	26		
11. その他	26		

略 語 集

なし（個別に各項目において解説する）

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯

セレコキシブは、COX-1 に対して COX-2 を数倍選択的に阻害することにより局所に生成されるプロスタグランジンを抑制し、抗炎症・鎮痛作用を示す選択的 COX-2 阻害薬である。

セレコキシブ錠 100mg「YD」及びセレコキシブ錠 200mg「YD」は株式会社陽進堂が後発医薬品として開発を企画し、薬食発 1121 第 2 号（平成 26 年 11 月 21 日）に基づき規格及び試験方法を設定、加速試験、生物学的同等性試験を実施し、令和 2 年 2 月に承認を得て、令和 2 年 6 月発売に至った。

2. 製品の治療学的特性

重大な副作用として、ショック、アナフィラキシー、消化性潰瘍、消化性出血、消化管穿孔、心筋梗塞、脳卒中、心不全、うっ血性心不全、肝不全、肝炎、肝機能障害、黄疸、再生不良性貧血、汎血球減少症、無顆粒球症、急性腎障害、間質性腎炎、中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis：TEN）、皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson 症候群）、多形紅斑、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎、間質性肺炎があらわれることがある。（「Ⅷ. 安全性（使用上の注意）」に関する項目）参照）

3. 製品の製剤学的特徴

該当しない

4. 適正使用に関して周知すべき特性

適正使用に関する資材、最適使用推進ガイドライン等	有無
RMP	無
追加のリスク最小化活動としている作成されている資材	無
最適使用推進ガイドライン	無
保険適用上の留意事項通知	無

（2024 年 10 月時点）

5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項

（1）承認条件

該当しない

（2）流通・使用上の制限事項

該当しない

6. RMP の概要

該当しない

Ⅱ．名称に関する項目

1．販売名

(1) 和名

セレコキシブ錠 100mg 「YD」 セレコキシブ錠 200mg 「YD」

(2) 洋名

CELECOXIB TABLETS 100mg CELECOXIB TABLETS 200mg

(3) 名称の由来

成分名＋剤形＋含量＋屋号

2．一般名

(1) 和名（命名法）

セレコキシブ（JAN）

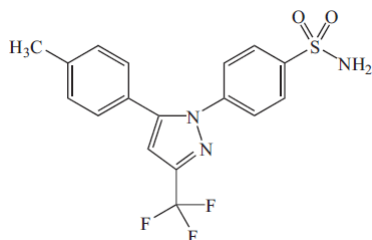
(2) 洋名（命名法）

Celecoxib（JAN）

(3) ステム

シクロオキシゲナーゼ阻害薬：-coxib

3．構造式又は示性式



4．分子式及び分子量

分子式：C₁₇H₁₄F₃N₃O₂S 分子量：381.37

5．化学名（命名法）

4- [5- (4-Methylphenyl) -3- (trifluoromethyl) -1*H*-pyrazol-1-yl]
benzenesulfoNamide (IUPAC)

6．慣用名、別名、略号、記号番号

該当資料なし

Ⅲ. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質

(1) 外観・性状

白色の粉末又は結晶性の粉末である。

(2) 溶解性

メタノールに溶けやすく、エタノール(99.5)にやや溶けやすく、水にほとんど溶けない。

(3) 吸湿性

該当資料なし

(4) 融点（分解点）、沸点、凝固点

融点：161 ～ 164℃

(5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

(6) 分配係数

該当資料なし

(7) その他の主な示性値

該当資料なし

2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

3. 有効成分の確認試験法、定量法

確認試験

(1) 紫外可視吸光度測定法

(2) 赤外吸収スペクトル測定法（臭化カリウム錠剤法）

定量法

液体クロマトグラフィー

I V. 製剤に関する項目

1. 剤形

(1) 剤形の区別

素錠

(2) 製剤の外観および性状

販売名		セレコキシブ錠 100mg 「YD」		セレコキシブ錠 200mg 「YD」	
剤形		割線入りの円形の素錠		割線入りのだ円形の素錠	
色調		白色			
重量		175 mg		350 mg	
形状	表面		直径 約 8.0mm		長径： 約 13.0 mm 短径： 約 6.5mm
	裏面				
	側面		厚さ 約 2.7mm		厚さ 約 5.1 mm

(3) 識別コード

セレコキシブ錠 100mg 「YD」：YD600 (PTP)

セレコキシブ錠 200mg 「YD」：YD601 (PTP)

(4) 製剤の物性

該当資料なし

(5) その他

該当しない

2. 製剤の組成

(1) 有効成分（活性成分）の含量及び添加剤

	セレコキシブ錠 100mg 「YD」	セレコキシブ錠 200mg 「YD」
1錠中の有効成分	セレコキシブ 100.0mg	セレコキシブ 200.0mg
添加剤	D-マンニトール、ヒドロキシプロピルセルロース、ラウリル硫酸 Na、ステアリン酸 Mg	

(2) 電解質等の濃度

該当しない

(3) 熱量

該当しない

3. 添付溶解液の組成及び容量

該当しない

4. 力価

該当しない

5. 混入する可能性のある夾雑物

該当資料なし

6. 製剤の各種条件下における安定性⁵⁸⁾

＜加速試験＞

セレコキシブ錠 100mg 「YD」

保存条件	40±2℃、75±5%RH	保存期間	6ヶ月間
包装形態	PTP 包装品		
	ポリ塩化ビニルフィルムとアルミニウム箔からなる PTP シート		
	バラ包装品		
	アルミニウム・ポリエチレン・ポリエチレンテレフタレートラミネート袋に入れ、加熱シールしたもの		

性状	白色の割線入りの円形の素錠	溶出試験	45 分間の溶出率は 70%以上
確認試験	試料溶液は標準溶液と同一波長のところに同様の強度の吸収を示す	製剤均一性 (含量均一性試験)	判定値を計算するとき 15.0%を超えない
製剤均一性 (質量偏差試験)	判定値を計算するとき 15.0%を超えない	定量試験	95.0～105.0%

PTP包装品

3ロット(試験回数3回/ロット)

試験項目	試験開始時	1ヶ月目	3ヶ月目	6ヶ月目
性状	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
製剤均一性試験 (含量均一性試験)	適合			適合
製剤均一性試験 (質量偏差試験)	適合			適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
定量試験(%)	100.1%	100.3%	100.2%	99.9%

バラ包装品

3ロット(試験回数3回/ロット)

試験項目	試験開始時	1ヶ月目	3ヶ月目	6ヶ月目
性状	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
製剤均一性試験 (含量均一性)	適合			適合
製剤均一性試験 (質量偏差)	適合			適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
定量試験(%)	100.1%	99.9%	99.9%	99.8%

セレキシブ錠 200mg「YD」

保存条件	40±2℃、75±5%RH	保存期間	6ヶ月間
包装形態	PTP 包装品		
	ポリ塩化ビニルフィルムとアルミニウム箔からなる PTP シート		

性状	白色の割線入りのだ円形の素錠	溶出試験	45 分間の溶出率は 70%以上
確認試験	試料溶液は標準溶液と同一波長のところに同様の強度の吸収を示す	製剤均一性 (含量均一性試験)	判定値を計算するとき 15.0%を超えない
製剤均一性 (質量偏差試験)	判定値を計算するとき 15.0%を超えない	定量試験	95.0～105.0%

PTP包装品

3ロット(試験回数3回/ロット)

試験項目	試験開始時	1ヶ月目	3ヶ月目	6ヶ月目
性状	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
製剤均一性試験 (含量均一性試験)	適合			適合
製剤均一性試験 (質量偏差試験)	適合			適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
定量試験(%)	100.2%	100.0%	100.3%	100.6%

7. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

8. 他剤との配合変化（物理化学的变化）

該当資料なし

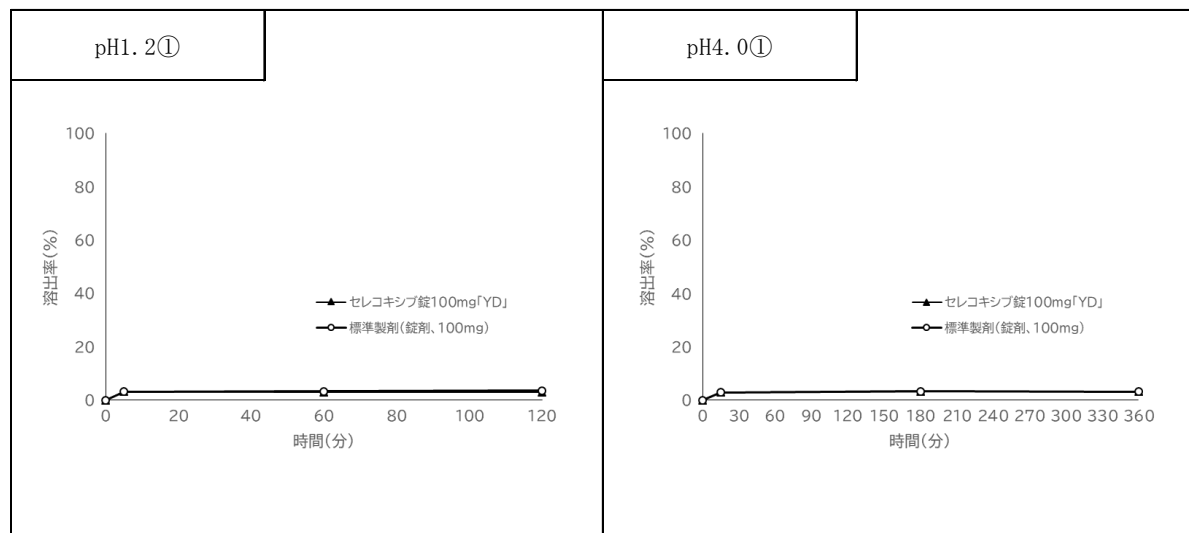
9. 溶出性^{9), 10)}

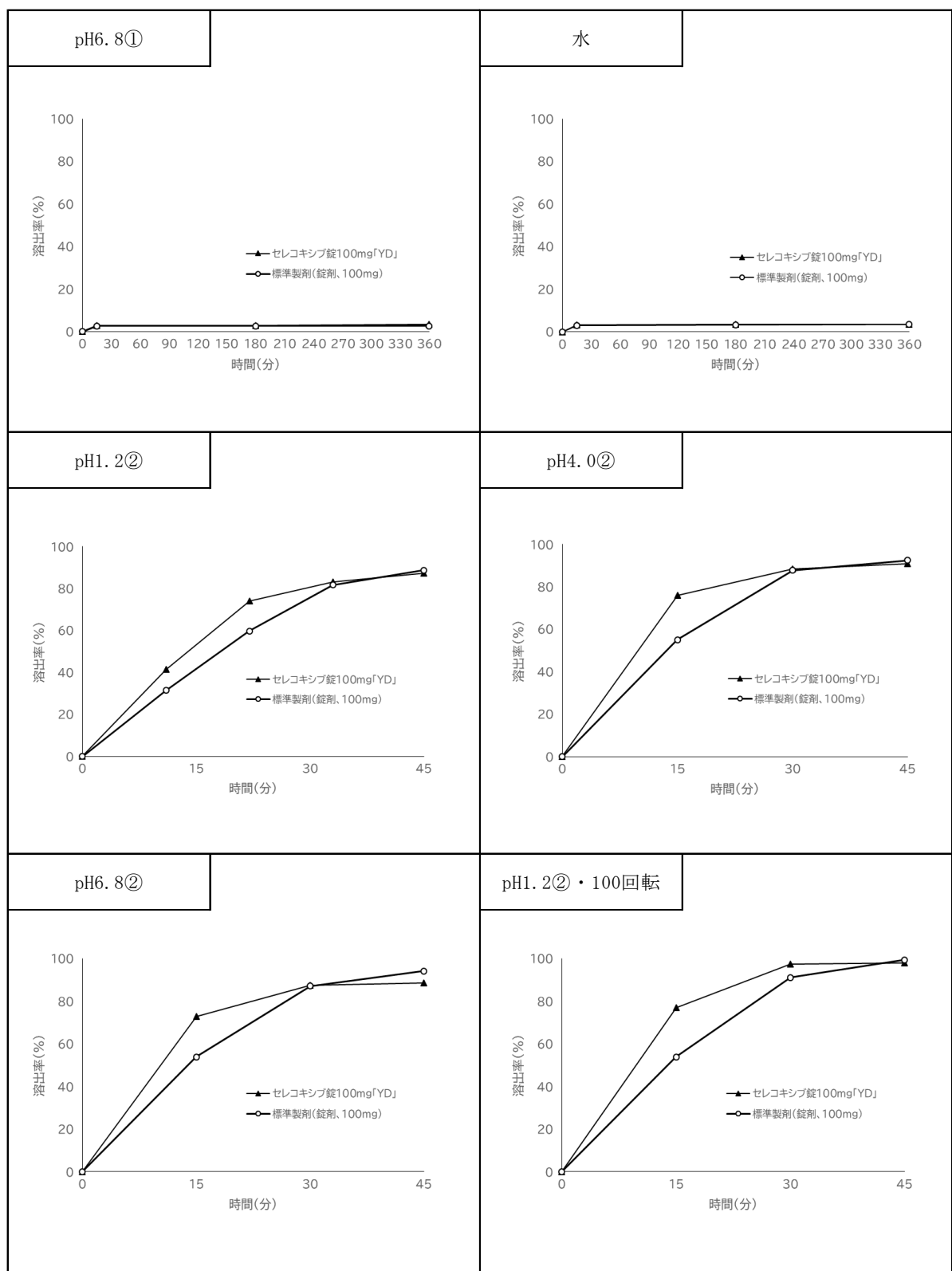
セレキシブ錠 100mg「YD」

装置	パドル法	温度	37±0.5℃
試験液量	900mL	回転数	50 回転・100 回転
試験液	pH1.2①-日本薬局方溶出試験第 1 液 pH4.0①-薄めた McIlvaine 緩衝液 pH6.8①-日本薬局方溶出試験第 2 液 水-日本薬局方精製水		
	pH1.2②-日本薬局方溶出試験第 1 液+ポリソルベート 80 0.5% pH4.0②-薄めた McIlvaine 緩衝液+ポリソルベート 80 0.5% pH6.8②-日本薬局方溶出試験第 2 液+ポリソルベート 80 0.5%		
ガイドライン	後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン		
判定基準	pH1.2①、pH4.0①、pH6.8①、水		
	規定された試験時間において、標準製剤の平均溶出率が 50%に達しないとき、標準製剤が規定された試験時間における平均溶出率の 1/2 の平均溶出率を示す適当な時点、及び規定された試験時間において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率±9%の範囲にあるか、又は f2 関数の値が 53 以上である。ただし、規定された試験時間において標準製剤の平均溶出率が 10%以下の場合、規定された		

	試験時間でのみ評価し、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率 $\pm 9\%$ の範囲にある。
	pH1.2②
	標準製剤が 30 分以内に平均 85%以上溶出しない場合、規定された試験時間において標準製剤の平均溶出率が 85%以上となる時、標準製剤の平均溶出率が 40% 及び 85% 付近の適当な2時点において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ の範囲にあるか、又は f_2 関数の値は 42 以上である。
	pH4.0②、pH6.8②、pH1.2②(100 回転)
	標準製剤が 15～30 分に平均 85%以上溶出する場合、標準製剤の平均溶出率が 60% 及び 85% 付近となる適当な 2 時点において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ の範囲にあるか、又は f_2 関数の値が 42 以上である。

装置(回転数)	試験液	ポイント	平均溶出率		f_2	差(絶対値)
			標準製剤	試験製剤		
パドル法(50 回転)	pH1.2①	120 分	3.0%	3.6%	—	0.6%
	pH4.0①	360 分	3.2%	3.3%	—	0.1%
	pH6.8①	360 分	3.4%	3.5%	—	0.1%
	水	360 分	2.7%	3.3%	—	0.6%
	pH1.2①	11 分	31.4%	41.5%	52.7	10.1%
		45 分	88.7%	87.2%		1.5%
	pH4.0①	15 分	55.1%	76.0%	45.7	21.0%
		30 分	87.8%	88.4%		0.6%
	pH6.8①	15 分	53.9%	72.8%	47.1	18.9%
		30 分	87.1%	87.4%		0.3%
パドル法(100 回転)	pH1.2②	15 分	53.9%	77.1%	42.8	23.2%
		30 分	91.1%	97.3%		6.2%

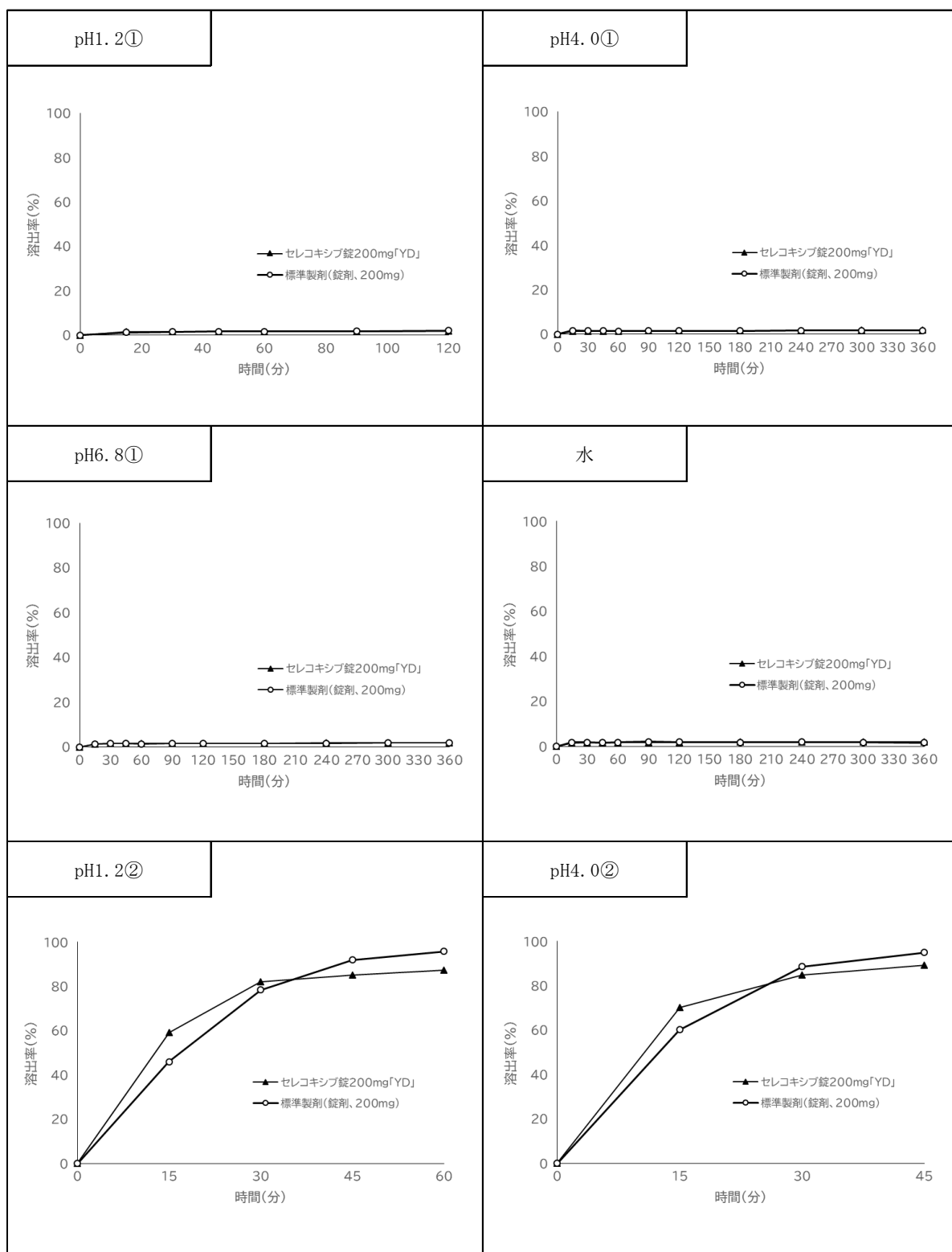


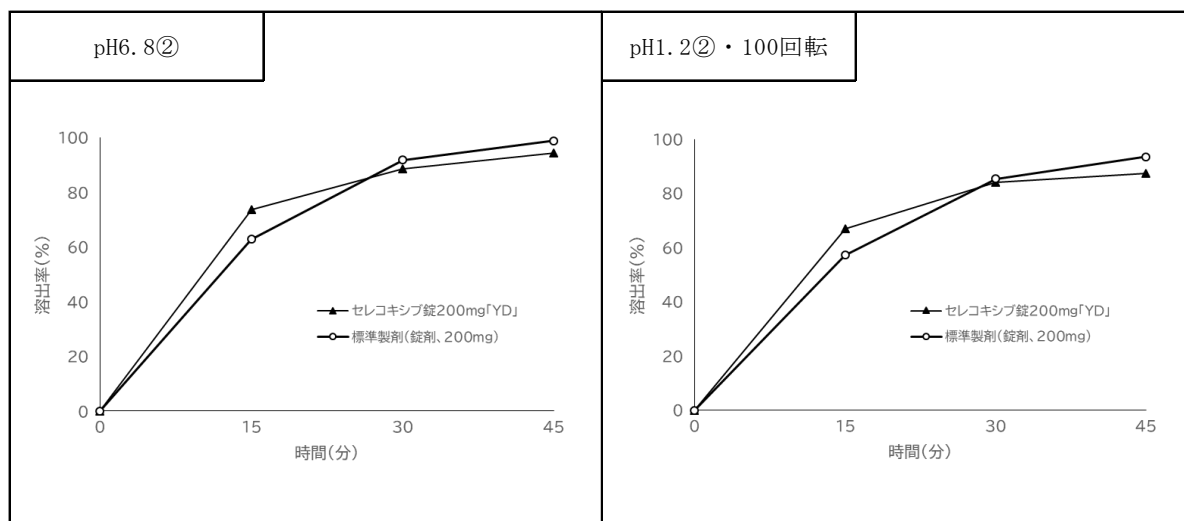


セレコキシブ錠 200mg 「YD」

装置	パドル法	温度	37±0.5℃
試験液量	900mL	回転数	50 回転・100 回転
試験液	pH1.2①-日本薬局方溶出試験第1液 pH4.0①-薄めた McIlvaine 緩衝液 pH6.8①-日本薬局方溶出試験第2液 水-日本薬局方精製水		
	pH1.2②-日本薬局方溶出試験第1液+ポリソルベート 80 0.5% pH4.0②-薄めた McIlvaine 緩衝液+ポリソルベート 80 0.5% pH6.8②-日本薬局方溶出試験第2液+ポリソルベート 80 0.5%		
ガイドライン	後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン		
判定基準	pH1.2①、pH4.0①、pH6.8①、水		
	規定された試験時間において、標準製剤の平均溶出率が 50%に達しないとき、標準製剤が規定された試験時間における平均溶出率の 1/2 の平均溶出率を示す適当な時点、及び規定された試験時間において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率±9%の範囲にあるか、又は f_2 関数の値が 53 以上である。ただし、規定された試験時間において標準製剤の平均溶出率が 10%以下の場合、規定された試験時間でのみ評価し、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率±9%の範囲にある。		
	pH1.2②		
	標準製剤が 30 分以内に平均 85%以上溶出しない場合、規定された試験時間において標準製剤の平均溶出率が 85%以上となると、標準製剤の平均溶出率が 40% 及び 85%付近の適当な2時点において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率±15%の範囲にあるか、又は f_2 関数の値は 42 以上である。		
	pH4.0②、pH6.8②、pH1.2②(100 回転)		
	標準製剤が 15～30 分に平均 85%以上溶出する場合、標準製剤の平均溶出率が 60%及び 85%付近となる適当な 2 時点において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率±15%の範囲にあるか、又は f_2 関数の値が 42 以上である。		

装置(回転数)	試験液	ポイント	平均溶出率		f_2	差(絶対値)
			標準製剤	試験製剤		
パドル法(50 回転)	pH1.2①	120 分	2.0%	1.9%	—	0.1%
	pH4.0①	360 分	1.6%	1.8%	—	0.2%
	pH6.8①	360 分	1.7%	1.9%	—	0.2%
	水	360 分	1.6%	2.0%	—	0.4%
	pH1.2①	15 分	46.0%	59.0%	—	13.0%
		30 分	78.4%	82.1%		3.7%
	pH4.0①	15 分	60.2%	70.2%	—	10.0%
		30 分	88.6%	84.9%		3.7%
	pH6.8①	15 分	57.3%	67.1%	—	9.8%
		30 分	85.4%	84.1%		1.3%
パドル法(100 回転)	pH1.2②	15 分	62.8%	73.6%	—	10.8%
		30 分	91.9%	88.7%		3.2%





10. 容器・包装

(1) 注意が必要な容器・包装、外観が特殊な容器・包装に関する情報

該当しない

(2) 包装

セレコキシブ錠 100mg「YD」	セレコキシブ錠 200mg「YD」
100 錠[10 錠(PTP) × 10]	100 錠[10 錠(PTP) × 10]
1000 錠[10 錠(PTP) × 100]	
500 錠(アルミ袋)	

(3) 予備容量

該当しない

(4) 容器の材質

PTP	ポリ塩化ビニルフィルム、アルミニウム箔、ポリエチレン・ポリプロピレンラミネートフィルム
バラ	アルミニウム・ポリエチレン・ポリエチレンテレフタレートラミネート袋

11. 別途提供される資材類

該当資料なし

12. その他

該当しない

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果

下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛

関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎
手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛

2. 効能又は効果に関連する使用上の注意

設定されていない

3. 用法及び用量

(1) 用法及び用量の解説

〈関節リウマチ〉

通常、成人にはセレコキシブとして1回100～200mgを1日2回、朝・夕食後に経口投与する。

〈変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎〉

通常、成人にはセレコキシブとして1回100mgを1日2回、朝・夕食後に経口投与する。

〈手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛〉

通常、成人にはセレコキシブとして初回のみ400mg、2回目以降は1回200mgとして1日2回経口投与する。なお、投与間隔は6時間以上あけること。

頓用の場合は、初回のみ400mg、必要に応じて以降は200mgを6時間以上あけて経口投与する。ただし、1日2回までとする。

(2) 用法及び用量の設定経緯・根拠

該当記載なし

4. 用法及び用量に関連する使用上の注意

7. 用法及び用量に関連する注意

7.1 慢性疾患（関節リウマチ、変形性関節症等）に対する使用において、本剤の投与開始後2～4週間を経過しても治療効果に改善が認められない場合は、他の治療法の選択について考慮すること。

7.2 本剤の1年を超える長期投与時の安全性は確立されておらず、外国において、本剤の長期投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象の発現を増加させるとの報告がある。[1. 参照]

7.3 他の消炎・鎮痛剤（心血管系疾患予防の目的で使用するアスピリンを除く）との併用は避けることが望ましい。

5. 臨床成績

(1) 臨床データパッケージ

該当資料なし

(2) 臨床薬理試験

該当資料なし

(3) 用量反応探索試験

該当資料なし

(4) 検証的試験

1) 有効性検証試験

17.1 有効性及び安全性に関する試験

17.1.1 有効性の主要な成績（国内臨床試験）

国内で関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎、手術後、外傷後及び抜歯後患者を対象に実施された臨床試験における有効性の主要な成績は以下のとおりであった。

関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎

疾患名	関節リウマチ				変形性関節症			
試験名	後期第Ⅱ相試験 ³⁰⁾			第Ⅲ相試験 ³¹⁾	後期第Ⅱ相試験 ³²⁾		第Ⅲ相試験 ³³⁾	
薬剤 用法・用量	プラセボ	セレコキシブ 100mg 1日2回	セレコキシブ 200mg 1日2回	セレコキシブ 200mg 1日2回	プラセボ	セレコキシブ 100mg 1日2回	プラセボ	セレコキシブ 100mg 1日2回
投与期間	4週			12週	4週		4週	
有効性解析症例数 ^{a)}	74	72	79	318	90	84	151	295
患者の疼痛評価(VAS) 平均変化量(mm)	3.4 ±17.39	-7.4 ±20.09	-11.4 ±19.01	-9.4 ±21.15	-19.8 ±21.23	-26.4 ±24.77	-21.6f)	-30.6f)
患者の疾患活動性 全般評価(VAS) ^{b)} 平均変化量(mm)	2.5 ±19.82	-7.5 ±17.03	-9.3 ±18.07	-9.3 ±20.26	-20.2 ±20.69	-25.1 ±24.07	-20.0f)	-27.3f)
医師の疾患活動性 全般評価(VAS) ^{c)} 平均変化量(mm)	-2.3 ±14.60	-8.8 ±15.81	-11.9 ±16.17	-9.6 ±19.85	-18.6 ±19.32	-24.9 ±21.66	-22.2f)	-30.2f)
ACR(変法)による改善率 ^{d)}	5/67 (7.5%)	12/72 (16.7%)	19/79 (24.1%)	68/318 (21.4%)				
最終全般改善度 判定による改善率 ^{e)}	17/73 (23.3%)	23/72 (31.9%)	25/79 (31.6%)	84/318 (26.4%)	45/90 (50.0%)	57/84 (67.9%)	74/151 (49.0%)	200/286 (69.9%)

疾患名	腰痛症	肩関節周囲炎	頸肩腕症候群	腱・腱鞘炎
試験名	第Ⅲ相試験 ³⁴⁾	一般臨床試験 ^{35)~37)}		
薬剤 用法・用量	セレコキシブ	セレコキシブ 100mg 1日2回		

	100mg 1日2回			
投与期間	4週	4週	4週	2週
有効性解析症例数 ^{a)}	414	74	80	79
患者の疼痛評価 (VAS)平均変化量(mm)	-29.4f)	-33.2 ±20.57	-34.3 ±21.28	-31.5 ±19.80
患者の全般評価 (VAS)平均変化量(mm)	-25.0f)	-32.4 ±23.56	-36.0 ±21.77	-28.1 ±20.41
医師の全般評価 (VAS)平均変化量(mm)	-27.1f)	-39.9 ±22.72	-37.3 ±17.38	-33.5 ±19.75
患者の改善度評価改善率 ^{h)}		36/74 (48.6%)	43/80 (53.8%)	41/79 (51.9%)
RDQ ⁱ⁾ 平均変化量 (スコア)	-3.6f)			
最終全般改善度判定 による改善率 ^{e)}	261/401 (65.1%)	48/74 (64.9%)	56/80 (70.0%)	53/79 (67.1%)

a) PPS (Per Protocol Set) : 治験実施計画書に適合した対象集団

b) 変形性関節症では、患者の全般評価

c) 変形性関節症では、医師の全般評価

d) ACR 改善基準 (変法) による改善率 (以下の 1) 及び 2) を満たす場合「改善」とする。

1) 疼痛関節数及び腫脹関節数がいずれも 20%以上改善、2) 患者の疼痛評価 (Visual Analogue Scale : VAS)、患者の疾患活動性全般評価 (VAS)、医師の疾患活動性全般評価 (VAS)、患者の身体機能評価 (mHAQ) の 4 項目のうち 3 項目以上において 20%以上改善)

e) 全般改善度判定の最終評価時における改善率又は最終全般改善度判定における改善率 (「中等度改善」以上の割合)

f) 共分散分析による調整済み平均値であるため、標準偏差については記載せず

g) FAS (Full Analysis Set) : 薬剤を 1 回以上服用し、投与後に有効性評価項目が評価されている対象集団

h) 患者の改善度評価が「良くなった」以上の割合 i) RDQ (Roland-Morris Disability Questionnaire) : 生活行動の障害に関する 24 項目の質問

疾患名	手術後疼痛		外傷後疼痛
試験名	第Ⅲ相試験 ³⁸⁾		一般臨床試験 ³⁹⁾
薬剤用法・用量	プラセボ	セレコキシブ ^{d)}	セレコキシブ ^{e)}
投与期間	2日		8日
有効性解析症例数 ^{a)}	124	248	80
患者の印象による有効率 ^{b)}	79/124 (63.7%)	189/248 (76.2%)	70/80 (87.5%)
疼痛強度差(VAS) (mm) ^{c)}			52.6±15.2

疾患名	抜歯後疼痛						抜歯後疼痛
試験名	第Ⅱ相試験 ⁴⁰⁾ 単回投与						第Ⅱ相試験 ⁴¹⁾ 追加投与 ^{†)}
薬剤 用法・用量	プラセボ	セレコキシブ					プラセボ セレコキシブ 200mg
		25mg 単回	50mg 単回	100mg 単回	200mg 単回	400mg 単回	
投与期間	1日(単回)						1日(2回)
有効性解析症例数 ^{a)}	53	58	54	54	53	58	58 64
患者の印象による有効率 ^{b)}	13/53 (24.5%)	28/58 (48.3%)	27/54 (50.0%)	39/54 (72.2%)	39/53 (73.6%)	47/58 (81.0%)	15/58 (25.9%) 41/64 (64.1%)

疼痛強度差 (VAS)(mm) ^{e)}		12.3 ±19.5	33.4 ±24.2
----------------------------------	--	---------------	---------------

- a) FAS (Full Analysis Set) 又は ITT (Intention To Treat) : 薬剤を 1 回以上服用し、投与後に有効性評価項目が評価されている対象集団
- b) 患者の印象による有効率 (「効いた」又は「よく効いた」と評価した患者の割合)
- c) 疼痛強度差 (VAS) (患者による評価、ベースライン時—最終評価時)
- d) 初回セレコキシブ 400mg 投与後、同日にセレコキシブ 200mg を投与し、翌日はセレコキシブ 200mg を 1 日 2 回投与した
- e) 初回セレコキシブ 400mg 投与後、同日にセレコキシブ 200mg を投与し、翌日以降はセレコキシブ 200mg を 1 日 2 回投与した
- f) セレコキシブ 400mg 投与後に、更に鎮痛薬を必要とした患者を対象に追加投与を行い、追加投与の有効性を評価した

17.1.2 消化管に対する影響 (国内臨床試験)

関節リウマチ患者 (投与期間 : 12 週間)、変形性関節症患者 (投与期間 : 4 週間) を対象とする実薬対照試験 2 試験の被験者データを集計した結果、消化管障害 (症状) 全体での副作用発現率はセレコキシブ 100~200mg 1 日 2 回投与で 12.6% (96/759)、対照薬 (COX-2 に対して選択性の低い非ステロイド性消炎・鎮痛剤) で 13.4% (103/769) であった^{42), 43)}。[8.4 参照]

17.1.3 心血管系に対する影響 (国内臨床試験)

国内で実施した関節リウマチ患者 (投与期間 : 12 週間)、変形性関節症患者 (投与期間 : 4 週間) を対象とする実薬対照試験 2 試験の被験者データを集計した結果、重篤な心血管事象の発現率は、セレコキシブ 100~200mg 1 日 2 回投与で 0% (0/759)、対照薬 (COX-2 に対して選択性の低い非ステロイド性消炎・鎮痛剤) で 0.3% (2/769) であった^{42), 43)}。また、関節リウマチ患者 (投与期間 : 4 週間) 及び変形性関節症患者 (投与期間 : 4 週間) を対象とするプラセボ対照二重盲検比較試験 3 試験における重篤な心血管事象の発現率はセレコキシブ 100~200mg 1 日 2 回投与で 0% (0/675)、プラセボで 0.2% (1/412) であった。なお、2007 年の承認時まで実施された最長 1 年までの投与期間で安全性を評価した国内全臨床試験 12 試験 (関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群及び腱・腱鞘炎患者を対象とした臨床試験) の被験者データにおける重篤な心血管事象の発現率は、セレコキシブ 25~400mg 1 日 2 回投与注) で 0.1% (2/2,398) であった⁴⁴⁾。さらに、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群 (いずれも投与期間 : 4 週間) 及び腱・腱鞘炎患者 (投与期間 : 2 週間) を対象とした試験 8 試験の被験者データの集計では、重篤な心血管事象の発現率はセレコキシブ 100~200mg 1 日 2 回投与で 0% (0/1,304) であった⁴⁵⁾。手術後 (投与期間 : 2 日間)、外傷後 (投与期間 : 8 日間)、抜歯後 (投与期間 : 1 回又は 2 回) の患者を対象とした試験 4 試験では、重篤な心血管事象の発現はセレコキシブ、プラセボ及び

対照薬（非ステロイド性消炎・鎮痛剤）のいずれの投与後にも認められなかった^{38), 46)}。

2) 安全性試験

該当資料なし

(5) 患者・病態別試験

該当資料なし

(6) 治療的使用

1) 使用成績調査（一般使用成績調査、特定使用成績調査、使用成績比較調査）、製造販売後データベース調査、製造販売後臨床試験の内容

17.2 製造販売後調査等

17.2.1 国内製造販売後臨床試験（健康成人の上部消化管粘膜に及ぼす影響の検討）

健康成人（投与期間：2週間）を対象とする実薬対照試験の結果、胃・十二指腸の潰瘍発現率（内視鏡所見）はセレコキシブ 100mg1 日 2 回投与で 1.4% (1/ 74)、対照薬（COX-2 に対して選択性の低い非ステロイド性消炎・鎮痛剤）で 27.6% (21/76)、プラセボで 2.7% (1/37) であった。

セレコキシブ群の胃・十二指腸の潰瘍以外で 2 例以上の副作用の発現率は、びらん性胃炎 10.5% (8/76)、腹部不快感 2.6% (2/76)、上腹部痛 2.6% (2/76)、胃炎 2.6% (2/ 76)、口内炎 2.6% (2/ 76) であった⁴⁷⁾。

2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した調査・試験の概要

該当しない

(7) その他

17.3 その他

17.3.1 長期予防投与試験（プラセボ比較大腸ポリープ再発予防試験）

外国において、セレコキシブの大腸ポリープ再発予防^{注)}（本剤の効能又は効果ではない）の検討を目的とする 2 試験が実施され、このうち APC 試験（散発性大腸腺腫再発予防試験）では、3 年間の治療期間中にプラセボと比較し、セレコキシブ投与での複合評価項目（心血管事象による死亡、心筋梗塞又は脳卒中）の発現率に用量相関的な増加が認められた。複合評価項目のプラセボに対するセレコキシブの相対リスクは 400mg1 日 2 回投与で 3.4 (95%CI : 1.4-8.5)、200mg1 日 2 回投与で 2.8 (95%CI : 1.1-7.2) であった。3 年間の複合評価項目の累積発現率では、プラセボでは 0.9% (6/679)、セレコキシブ 400mg1 日 2 回投与で 3.0% (20/671)、200mg1 日 2 回投与で 2.5% (17/685) であった。一方、PreSAP 試験（大腸腺腫性ポリー

プ再発予防試験)では、複合評価項目についてプラセボと比較した相対リスクは400mg1日1回投与で1.2(95%CI:0.6-2.4)で有意なリスクの増大は認められなかった。3年間の複合評価項目の累積発現率では、プラセボでは1.9%(12/628)、セレコキシブ400mg1日1回投与で2.3%(21/933)であった^{48)~50)}(外国人データ)。^[1. 参照]

注) 本剤の承認された用法及び用量は関節リウマチ:100~200mgを1日2回、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎:100mgを1日2回、手術後、外傷後、抜歯後の消炎・鎮痛:初回のみ400mg、2回目以降は1回200mgとして1日2回経口投与する。なお、投与間隔は6時間以上あけること。頓用の場合は、初回のみ400mg、必要に応じて以降は200mgを6時間以上あけて経口投与する。ただし、1日2回までとする。

V I . 薬効薬理に関する項目

1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

アセメタシン、インドメタシン、ジクロフェナクナトリウム、インドメタシンファルネシル、スリンダク、ナブメトン、プログルメタシンマレイン酸塩、フルフェナム酸アルミニウム、メフェナム酸、チアプロフェン酸、ロキソプロフェンナトリウム水和物、イブプロフェン、プラノプロフェン、オキサプロジン、ザルトプロフェン、ナプロキセン、フルルビプロフェン、アンピロキシカム、ピロキシカム、メロキシカム、ロルノキシカム、エトドラク、アスピリン

2. 薬理作用

(1) 作用部位・作用機序

18.1 作用機序

セレコキシブは、シクロオキシゲナーゼ (COX) に対する阻害活性を検討するためのヒト遺伝子組換え酵素を用いた実験及び COX-1、COX-2 をそれぞれ発現したヒト由来細胞を用いた実験において、COX-2 に対して選択的な阻害作用を示した^{51), 52)} (invitro 試験)。セレコキシブは、炎症局所に誘導される COX-2 を選択的に阻害し、COX-2 由来のプロスタグランジン類の合成を抑制することにより、消炎・鎮痛作用を示すと考えられる⁵³⁾。

(2) 薬効を裏付ける試験成績

18.2 抗炎症及び鎮痛作用

セレコキシブは、慢性炎症モデルであるラットのアジュバント関節炎モデルにおいて、ロキソプロフェン及びインドメタシンと同程度の抗炎症及び鎮痛作用を示した^{54)~56)}。

18.3 消化管に対する作用

セレコキシブは、ラットに対して胃及び小腸粘膜障害作用を示さなかった。一方、インドメタシン、ロキソプロフェン、ジクロフェナク及びナプロキセンは用量依存的に胃及び小腸粘膜障害を惹起した⁵²⁾。[8.4 参照]

18.4 血小板凝集に対する作用

セレコキシブは、ヒト末梢血血小板においてアラキドン酸惹起血小板凝集を抑制しなかった。一方、ロキソプロフェン、インドメタシン、ジクロフェナク及びイブプロフェンは濃度依存的に血小板凝集を抑制した⁵²⁾ (*in vitro* 試験)。

18.5 ニューキノロン系抗菌薬との併用

一部のニューキノロン系抗菌薬は、ある種の非ステロイド性消炎・鎮痛剤を併用することで、まれに痙攣を誘発することが知られている⁵⁷⁾。セレコキシ

ブとエノキサシン等のニューキノロン系抗菌薬をマウスに併用投与しても、
痙攣は誘発されなかった⁵⁸⁾。

(3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし

V II. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移

(1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

(2) 臨床試験で確認された血中濃度

16.1.1 健康成人における薬物動態

健康成人男女 36 例にセレコキシブ 50～400mg^{注)}を空腹下单回投与したときの血漿中濃度は投与約 2 時間後に最高血漿中濃度 (C_{max}) に達した後、約 5～9 時間の半減期 ($t_{1/2}$) で消失し、C_{max} 及び血漿中濃度－時間曲線下面積 (AUC) は高用量で用量比より低い比率で上昇した⁵⁾。また、健康成人男性 30 例にセレコキシブ 200mg を空腹下もしくは食後に単回投与したとき、食後投与時の C_{max} は 1.5 倍に上昇したが、AUC は影響を受けなかった⁶⁾。健康成人男性 35 例にセレコキシブ 100mg を 1 日 2 回、食後 7 日間反復投与したとき、定常状態 (7 日目) の C_{max} は約 607ng/mL、AUC₀₋₁₂ は約 2652ng・hr/mL であり、蓄積性は観察されなかった⁷⁾。

注) 本剤の承認された用法及び用量は関節リウマチ：100～200mg を 1 日 2 回、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎：100mg を 1 日 2 回、手術後、外傷後、拔牙後の消炎・鎮痛：初回のみ 400mg、2 回目以降は 1 回 200mg として 1 日 2 回経口投与する。なお、投与間隔は 6 時間以上あけること。頓用の場合は、初回のみ 400mg、必要に応じて以降は 200mg を 6 時間以上あけて経口投与する。ただし、1 日 2 回までとする。

健康成人にセレコキシブを単回経口投与したときの薬物動態パラメータ

用量 (例数)	T _{max} (hr)	C _{max} (ng/mL)	$t_{1/2}$ (hr)	AUC _{inf} (ng・hr/mL)
50mg (36例)	2±1.3	287±100.4	5±2.4	1631±540.2
100mg (34例)	2±1.4	553±212.2	7±3.2	3429±1149.8
200mg (34例)	2±0.9	815±303.0	8±3.5	5832±1674.5
400mg (34例)	2±0.9	1296±457.7	9±4.1	10789±3793.4

16.1.2 患者における薬物動態

関節リウマチ患者及び変形性膝関節症患者 609 例にセレコキシブ 25～300mg^{注)}を 1 日 2 回、食後反復投与したときの血漿中濃度値 1,160 点を用いた母集団薬物動態解析の結果、定常状態における経口クリアランス (CL/F) 及びみかけの分布容積 (Vd/F) の母集団平均 (個体間変動) はそれぞれ 21.2L/hr (約 42%) 及び 335L (約 77%) と推定された。また、年齢及び体重は CL/F の、血清アルブミン濃度は Vd/F の変動要因であると推察された⁸⁾。

注) 本剤の承認された用法及び用量は関節リウマチ：100～200mg を1日2回、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎：100mg を1日2回、手術後、外傷後、拔牙後の消炎・鎮痛：初回のみ400mg、2回目以降は1回200mgとして1日2回経口投与する。なお、投与間隔は6時間以上あけること。頓用の場合は、初回のみ400mg、必要に応じて以降は200mgを6時間以上あけて経口投与する。ただし、1日2回までとする。

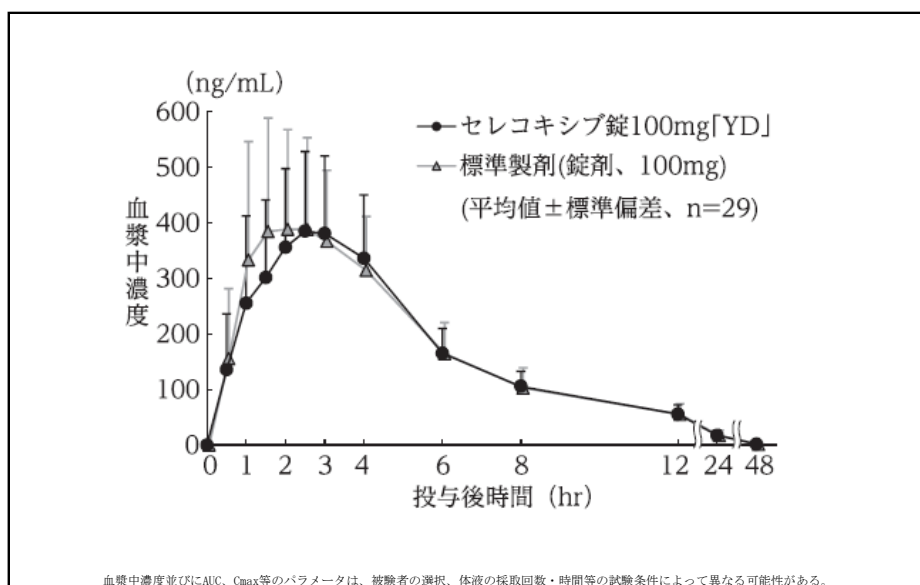
16.1.3 生物学的同等性試験^{9)・10)}

セレコキシブ錠 100mg「YD」

ガイドライン	後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン
概要	セレコキシブ錠 100mg「YD」と標準製剤をクロスオーバー法によりそれぞれ1錠(セレコキシブとして100mg)、健康成人男子29名に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定した。
結果	本試験より得られた薬物動態パラメータ(AUC、Cmax)を統計的に解析したところ、両剤は生物学的に同等と推定された。

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₄₈ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	t _{1/2} (hr)
セレコキシブ錠 100mg「YD」	2937.4±741.0	426.5±148.9	2.5±0.9	7.5±3.8
標準製剤(錠剤、 100mg)	2969.9±795.7	455.3±179.3	2.2±1.0	6.8±2.9

(平均値±標準偏差、n=29)

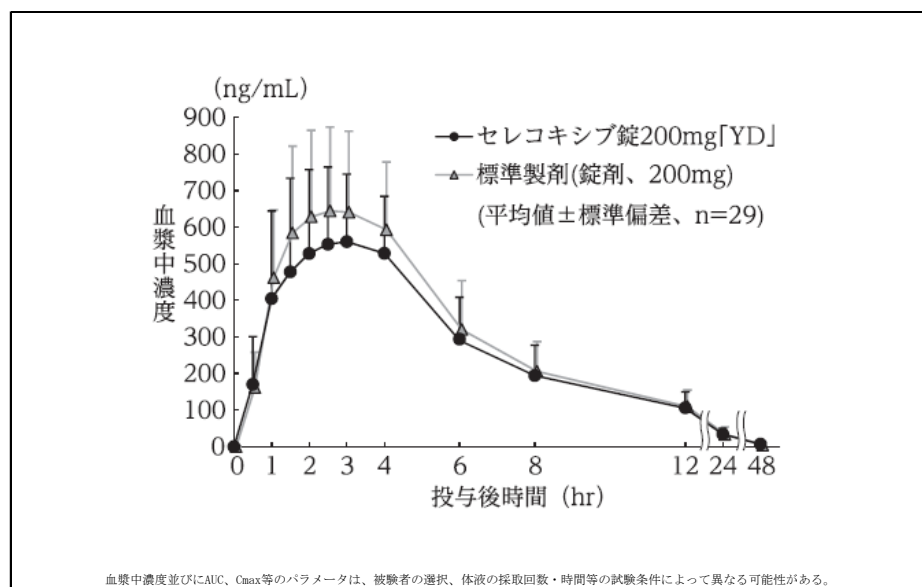


セレコキシブ錠 200mg「YD」

ガイドライン	後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン
概要	セレコキシブ錠 200mg「YD」と標準製剤をクロスオーバー法によりそれぞれ1錠(セレコキシブとして 200mg)、健康成人男子 29 名に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定した。
結果	本試験より得られた薬物動態パラメータ(AUC、Cmax)を統計的に解析したところ、両剤は生物学的に同等と推定された。

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₄₈ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	t _{1/2} (hr)
セレコキシブ錠 200mg「YD」	4984.4 ± 1502.6	639.6 ± 172.9	2.8 ± 1.0	9.6 ± 6.6
標準製剤 (錠 剤、200 mg)	5402.6 ± 1495.3	718.4 ± 201.3	2.6 ± 0.9	7.6 ± 3.3

(平均値 ± 標準偏差、n=29)



(3) 中毒域

該当資料なし

(4) 食事・併用薬の影響

16.7.1 リチウム

健康成人 24 例にセレコキシブ 200 mg とリチウム 450mg を 1 日 2 回、食後 7 日間併用したとき、定常状態におけるリチウムの Cmax 及び AUC は併用によりいずれも約 1.2 倍に上昇した²³⁾ (外国人データ)。^[10.2 参照]

16.7.2 フルコナゾール

健康成人 17 例にフルコナゾール 200mg を 1 日 1 回、7 日間投与した後に、セレコキシブ 200mg を空腹下单回併用投与したとき、セレコキシブの Cmax

及び AUC は併用によりそれぞれ約 1.7 倍及び約 2.3 倍に上昇した¹³⁾ (外国人データ)。[10.2 参照]

16.7.3 フルバスタチン

健康成人 15 例にセレコキシブ 200mg とフルバスタチン 20mg を 1 日 2 回、食後 7 日間併用したとき、セレコキシブの C_{max} 及び AUC は併用によりいずれも約 1.3 倍に上昇した。また、健康成人 13 例にセレコキシブ 200mg とフルバスタチン 20mg を 1 日 2 回、食後 7 日間併用したとき、フルバスタチンの C_{max} は併用により約 1.2 倍に上昇したが、AUC は影響を受けなかった²⁴⁾ (外国人データ)。[10.2 参照]

16.7.4 ワルファリン

健康成人 12 例にワルファリンを事前投与した後に、セレコキシブ 200mg を 1 日 2 回とワルファリン 1～5mg を 1 日 1 回、7 日間併用したとき、セレコキシブはワルファリンの血漿中濃度及びプロトロンビン時間に影響を及ぼさなかった。しかしながら、海外で特に高齢者において、セレコキシブとワルファリンを併用している患者に、プロトロンビン時間の延長を伴う重篤で場合によっては致命的な出血が報告されている²⁵⁾ (外国データ)。

2. 薬物速度論的パラメータ

(1) 解析方法

該当資料なし

(2) 吸収速度定数

該当資料なし

(3) 消失速度定数

該当資料なし

(4) クリアランス

該当資料なし

(5) 分布容積

該当資料なし

(6) その他

該当資料なし

3. 母集団（ホピュレーション）解析

（1）解析方法

該当資料なし

（2）パラメータ変動要因

該当資料なし

4. 吸収

該当資料なし

5. 分布

（1）血液－脳関門通過性

該当資料なし

（2）血液－胎盤関門通過性

該当資料なし

（3）乳汁への移行性

該当資料なし

（4）髄液への移行性

該当資料なし

（5）その他の組織への移行性

該当資料なし

（6）血漿蛋白結合率

16.3.1 蛋白結合

In vitro 及び *ex vivo* による検討の結果、セレコキシブの血漿蛋白結合率は約 97%であり、主としてアルブミンに、ついで α_1 -酸性糖蛋白質に結合することが示された¹¹⁾。

6. 代謝

（1）代謝部位及び代謝経路

16.4 代謝

*In vitro*¹²⁾ 及び *in vivo*¹³⁾ 試験の結果から、セレコキシブは主として薬物代謝酵素 CYP2C9 を介して代謝されることが明らかとなっている。

CYP2C9 には遺伝多型が存在し、Ile359→Leu359 のアミノ酸置換により薬剤によっては代謝速度が低下する場合がある。日本人 218 例を対象とした

CYP2C9 の研究では、Ile359→Leu359 のホモ接合体 (CYP2C9*3/*3) は存在しなかったが、Leu359 のヘテロ接合体 (CYP2C9*1/*3) は 218 例中 9 例 (4.1%) 存在したとの報告がある¹⁴⁾。

CYP2C9 の遺伝多型 (CYP2C9*3) の影響として、セレコキシブを単回又は反復投与したとき、CYP2C9 のヘテロ接合体 (Ile359→Leu359、CYP2C9*1/*3) を有する健康成人 15 例の AUC は野生型 (CYP2C9*1/*1) の健康成人 137 例に比べて約 1.6 倍と高値を示した¹⁵⁾。健康成人にセレコキシブ 100mg を単回投与注)したとき、CYP2C9*1/*1 (4 例) と比較し、CYP2C9*3/*3 (3 例) の AUC は約 3 倍高値を示し¹⁶⁾ (外国人データ)、健康成人にセレコキシブ 200mg を 1 日 1 回^{注)}7 日間反復投与したとき、CYP2C9*1/*1 (7 例) と比較し、CYP2C9*3/*3 (3 例) の C_{max} は約 4 倍、AUC は約 7 倍高値を示すことが報告されている¹⁷⁾ (外国人データ)。

[10. 参照]

注) 本剤の承認された用法及び用量は関節リウマチ：100～200mg を 1 日 2 回、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎：100mg を 1 日 2 回、手術後、外傷後、拔牙後の消炎・鎮痛：初回のみ 400mg、2 回目以降は 1 回 200mg として 1 日 2 回経口投与する。なお、投与間隔は 6 時間以上あけること。頓用の場合は、初回のみ 400mg、必要に応じて以降は 200mg を 6 時間以上あけて経口投与する。ただし、1 日 2 回までとする。

(2) 代謝に関与する酵素 (CYP450 等) の分子種、寄与率

該当資料なし

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

(4) 代謝物の活性の有無及び比率

該当資料なし

7. 排泄

16.5 排泄

健康成人男性にセレコキシブを投与したときの未変化体の尿及び糞中排泄率は低く (～3%)、セレコキシブのクリアランスは主として代謝クリアランスによると推察された。健康成人男性に¹⁴C-セレコキシブ 300mg^{注)}を空腹下单回投与したときの血漿、尿及び糞中に COX-1 及び COX-2 阻害活性を示さない代謝物が 3 種類同定され、血漿中には主として未変化体が存在していた。また、放射能の尿及び糞中排泄率はそれぞれ用量の約 27%及び約 58%であった^{18), 19)} (外国人データ)。

注) 本剤の承認された用法及び用量は関節リウマチ：100～200mg を 1 日 2 回、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腱・腱鞘炎：100mg を 1 日 2 回、手術後、外傷後、拔牙

後の消炎・鎮痛：初回のみ 400mg、2 回目以降は 1 回 200mg として 1 日 2 回経口投与する。なお、投与間隔は 6 時間以上あけること。頓用の場合は、初回のみ 400mg、必要に応じて以降は 200mg を 6 時間以上あけて経口投与する。ただし、1 日 2 回までとする。

8. トランスポーターに関する情報

該当資料なし

9. 透析等による除去率

該当資料なし

10. 特定の背景を有する患者

16.6.1 腎機能障害患者

慢性腎障害患者（糸球体濾過率 34～60mL/分）22 例にセレコキシブ 200mg を 1 日 2 回、食後 7 日間反復投与したときの AUC_{0-72} は健康成人における値と大差なかった²⁰⁾（外国人データ）。

16.6.2 肝機能障害患者

肝障害患者及び健康成人にセレコキシブ 100mg を 1 日 2 回、食後 5 日間反復投与したとき、軽度肝障害患者（Child-Pugh Class A：12 例）の AUC_{0-12} は健康成人（12 例）に比べて約 1.3 倍に、中等度肝障害患者（Child-Pugh Class B：11 例）では健康成人（11 例）に比べて約 2.7 倍に上昇した²¹⁾（外国人データ）。
[9.3.2 参照]

16.6.3 高齢者

健康高齢男女（66～83 歳）24 例及び非高齢男女（19～48 歳）24 例にセレコキシブ 200mg を 1 日 2 回、8 日間反復投与したとき、定常状態における空腹下投与時の高齢男女の C_{max} 及び AUC_{0-12} （ C_{max} ：1808ng/mL、 AUC_{0-12} ：11852ng・hr/mL）は非高齢男女（ C_{max} ：973ng/mL、 AUC_{0-12} ：5871ng・hr/mL）と比較して高値を示した。また、高齢女性の C_{max} 及び AUC_{0-12} （ C_{max} ：2362ng/mL、 AUC_{0-12} ：15466ng・hr/mL）は高齢男性（ C_{max} ：1254ng/mL、 AUC_{0-12} ：8238ng・hr/mL）より高値を示した²²⁾（外国人データ）。

11. その他

該当資料なし

V Ⅲ. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

1. 警告内容とその理由

1. 警告

外国において、シクロオキシゲナーゼ（COX）-2 選択的阻害剤等の投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象のリスクを増大させる可能性があり、これらのリスクは使用期間とともに増大する可能性がある」と報告されている。[7. 2、8. 1、8. 2、9. 1. 1、11. 1. 3、17. 3. 1 参照]

2. 禁忌内容とその理由

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

2. 1 本剤の成分又はスルホンアミドに対し過敏症の既往歴のある患者

2. 2 アスピリン喘息（非ステロイド性消炎・鎮痛剤等による喘息発作の誘発）又はその既往歴のある患者〔重症喘息発作を誘発するおそれがある。〕[9. 1. 6 参照]

2. 3 消化性潰瘍のある患者〔消化性潰瘍を悪化させるおそれがある。〕[9. 1. 4 参照]

2. 4 重篤な肝障害のある患者 [9. 3. 1 参照]

2. 5 重篤な腎障害のある患者 [9. 2. 1 参照]

2. 6 重篤な心機能不全のある患者〔プロスタグランジン合成阻害作用に基づくナトリウム・水分貯留傾向があるため心機能を悪化させるおそれがある。〕[9. 1. 2 参照]

2. 7 冠動脈バイパス再建術の周術期患者〔外国において、類薬で心筋梗塞及び脳卒中の発現が増加するとの報告がある。〕[9. 1. 1 参照]

2. 8 妊娠末期の女性 [9. 5. 1 参照]

3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由

設定されていない

4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由

7. 1 慢性疾患（関節リウマチ、変形性関節症等）に対する使用において、本剤の投与開始後 2～4 週間を経過しても治療効果に改善が認められない場合は、他の治療法の選択について考慮すること。

7. 2 本剤の 1 年を超える長期投与時の安全性は確立されておらず、外国において、本剤の長期投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象の発現を増加させるとの報告がある。[1. 参照]

7. 3 他の消炎・鎮痛剤（心血管系疾患予防の目的で使用するアスピリンを除く）との併用は避けることが望ましい。

5. 重要な基本的注意とその理由

8. 重要な基本的注意

- 8.1 本剤を使用する場合は、有効最小量を可能な限り短期間投与することに留め、長期にわたり漫然と投与しないこと。[1. 参照]
- 8.2 本剤の投与により、心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象が発現するおそれがあるので、観察を十分に行い、これらの徴候及び症状の発現には十分に注意すること。[1.、9.1.1 参照]
- 8.3 本剤には血小板に対する作用がないので、心血管系疾患予防の目的でアスピリンの代替薬として使用しないこと。抗血小板療法を行っている患者については、本剤投与に伴い、その治療を中止してはならない。
- 8.4 国内で患者を対象に実施した臨床試験では COX-2 に対して選択性の高い本剤と選択性の低い非ステロイド性消炎・鎮痛剤による消化管の副作用発現率に差は認められなかった。特に、消化管障害発生のリスクファクターの高い患者への投与に際しては副作用の発現に十分な観察を行うこと。[17.1.2、18.3 参照]
- 8.5 肝不全、肝炎、AST、ALT、ビリルビン等の上昇、黄疸の発現が報告されているので、定期的に肝機能検査を行うなど観察を十分に行うこと。[11.1.5 参照]
- 8.6 急性腎障害、間質性腎炎等の重篤な腎障害の発現が報告されているので、定期的に腎機能検査を行うなど観察を十分に行うこと。[11.1.7 参照]
- 8.7 本剤の投与により、中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis：TEN）、皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson 症候群）等の重篤で場合によっては致命的な皮膚症状が発現するおそれがあり、多くの場合、これらの事象は投与開始後 1 カ月以内に発現しているので、治療初期には特に注意すること。[11.1.8 参照]
- 8.8 慢性疾患（関節リウマチ、変形性関節症等）に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
 - ・定期的あるいは必要に応じて臨床検査（尿検査、血液検査、腎機能検査、肝機能検査、心電図検査及び便潜血検査等）を行うこと。
 - ・消炎・鎮痛剤による治療は原因療法ではなく、対症療法であることに留意すること。また、薬物療法以外の療法も考慮すること。
- 8.9 急性疾患（手術後、外傷後並びに抜歯後の消炎・鎮痛）に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
 - ・急性炎症及び疼痛の程度を考慮し、投与すること。
 - ・原則として長期投与を避けること。
 - ・原因療法があればこれを行い、本剤を漫然と投与しないこと。
 - ・初回の投与量が 2 回目以降と異なることに留意し、患者に対し服用方法について十分説明すること。
- 8.10 本剤で報告されている薬理作用により、感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染症の発現に十分に注意し慎重に投与すること。
- 8.11 浮動性めまい、回転性めまい、傾眠等が起こることがあるので、自動車の運転

等危険を伴う作業に従事する場合には注意させること。

6. 特定の背景を有する患者に関する注意

(1) 合併症・既往歴等のある患者

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 心血管系疾患又はその既往歴のある患者（冠動脈バイパス再建術の周術期患者を除く）

[1、2.7、8.2 参照]

9.1.2 心機能障害のある患者（重篤な心機能不全のある患者を除く）

水、ナトリウムの貯留が起こる可能性があり、心機能障害を悪化させるおそれがある。 [2.6 参照]

9.1.3 高血圧症のある患者

水、ナトリウムの貯留が起こる可能性があり、血圧を上昇させるおそれがある。

9.1.4 消化性潰瘍の既往歴のある患者

消化性潰瘍を再発させるおそれがある。 [2.3 参照]

9.1.5 非ステロイド性消炎・鎮痛剤の長期投与による消化性潰瘍のある患者で、本剤の長期投与が必要であり、かつミソプロストールによる治療が行われている患者本剤を継続投与する場合には、十分経過を観察し、慎重に投与すること。ミソプロストールは非ステロイド性消炎・鎮痛剤により生じた消化性潰瘍を効能又は効果としているが、ミソプロストールによる治療に抵抗性を示す消化性潰瘍もある。

9.1.6 気管支喘息のある患者（アスピリン喘息又はその既往歴のある患者を除く）

(2) 腎機能障害患者

9.2 腎機能障害患者

9.2.1 重篤な腎障害のある患者

投与しないこと。腎障害を悪化させるおそれがある。

[2.5 参照]

9.2.2 腎障害又はその既往歴のある患者（重篤な腎障害のある患者を除く）

腎血流量低下及び水、ナトリウムの貯留が起こる可能性があり、腎障害を悪化又は再発させるおそれがある。

(3) 肝機能障害患者

9.3 肝機能障害患者

9.3.1 重篤な肝障害のある患者

投与しないこと。肝障害を悪化させるおそれがある。 [2.4参照]

(4) 生殖能を有するもの

設定されていない

(5) 妊婦

9.5 妊婦

9.5.1 妊娠末期の女性

投与しないこと。妊娠末期のマウス¹⁾及びヒツジ²⁾への投与において、胎児の動脈管収縮が報告されている。

[2.8参照]

9.5.2 妊婦（妊娠末期を除く）又は妊娠している可能性のある女性治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。投与する際には、必要最小限にとどめ、羊水量、胎児の動脈管収縮を疑う所見を妊娠週数や投与日数を考慮して適宜確認するなど慎重に投与すること。シクロオキシゲナーゼ阻害剤（経口剤、坐剤）を妊婦に使用し、胎児の腎機能障害及び尿量減少、それに伴う羊水過少症が起きたとの報告がある。シクロオキシゲナーゼ阻害剤（全身作用を期待する製剤）を妊娠中期の妊婦に使用し、胎児の動脈管収縮が起きたとの報告がある。培養細胞を用いた染色体異常試験において、細胞毒性が認められる濃度で染色体の数的異常（核内倍加細胞の増加）が、生殖発生毒性試験で着床後死亡数や死産の増加、横隔膜ヘルニア、胎児体重減少等が認められている。またラットにおいて本剤が胎児に移行することが報告されている。

(6) 授乳婦

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。ヒト母乳中への移行が報告されている^{3),4)}。

(7) 小児等

9.7 小児等

小児等を対象とした国内臨床試験は実施していない。

(8) 高齢者

9.8 高齢者

患者の状態を観察しながら、慎重に投与すること。一般に生理機能が低下している。

7. 相互作用

10. 相互作用

本剤は、主として薬物代謝酵素 CYP2C9 で代謝される。

また、本剤は CYP2D6 の基質ではないが、CYP2D6 の阻害作用を有する。[16.4 参照]

(1) 併用禁忌とその理由

設定されていない

(2) 併用注意とその理由

10.2 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ACE阻害剤 エナラプリルマレイン酸塩 イミダプリル塩酸 塩テモカプリル塩酸塩 等 アンジオテンシンⅡ受容体拮抗剤 カンデサルタンシレキセチル バルサルタン ロサルタンカリウム 等	非ステロイド性消炎・鎮痛剤（NSAID）はアンジオテンシン変換酵素（ACE）阻害剤の降圧効果を減弱させる可能性があるとの報告がある。本剤と ACE阻害剤又はアンジオテンシンⅡ受容体拮抗剤との相互作用は明らかではないが、併用する場合は相互作用の起こる可能性を考慮すること。 （なお、リシノプリルを併用した臨床試験では、顕著な血圧変化は認められなかったとの報告がある）	他のNSAIDでは、腎臓におけるプロスタグランジン合成阻害によると考えられている。
フロセミド チアジド系利尿剤 トリクロルメチアジド ヒドロクロロチアジド 等	患者によっては他の NSAIDがフロセミド及びチアジド系利尿剤のナトリウム排泄作用を低下させることが示されている。本剤と、フロセミド又はチアジド系利尿剤との相互作用は明らかではないが、併用する場合は相互作用の起こる可能性を考慮すること。	他のNSAIDでは、腎臓におけるプロスタグランジン合成阻害によると考えられている。
アスピリン	本剤と低用量アスピリン（1日325mg以下）を併用した場合、本剤のみを服用したときに比べて消化性潰瘍・消化管出血等の発生率が高くなることが報告されている。	アスピリンの併用により NSAIDの消化性潰瘍・消化管出血等を助長させると考えられている。
抗血小板薬 クロピドグレル 等	本剤と抗血小板薬を併用した場合、本剤のみを服用したときに比べて消化管出血の発生率が高くなることが報告されている。	これらの薬剤は血小板凝集抑制作用を有するため、NSAIDの消化管出血を助長させると考えられている。
リチウム [16.7.1参照]	リチウムの血漿中濃度が上昇し、リチウムの作用が増強するおそれがある。リチウムを使用中の患者に本剤の投与を開始又は中止するときには十分に患者をモニターすること。	機序は明らかではないが、腎排泄を阻害するためと考えられている。

	と。	
フルコナゾール [16. 7. 2参照]	本剤の血漿中濃度が上昇し、本剤の作用が増強するおそれがある。フルコナゾールを使用中の患者には本剤の投与を低用量から開始すること。	CYP2C9による本剤の代謝を阻害すると考えられている。
フルバスタチン [16. 7. 3参照]	本剤及びフルバスタチンの血漿中濃度が上昇し、本剤及びフルバスタチンの作用が増強するおそれがある。	CYP2C9による本剤の代謝を阻害するため、また本剤と同じCYP2C9で代謝されるためと考えられている。
クマリン系抗凝血剤ワルファリン [16. 7. 4参照]	プロトロンビン時間が延長するおそれがある。海外で特に高齢者において、重篤の場合によっては致命的な出血が報告されている。ワルファリンを使用中の患者に本剤の投与を開始あるいは用法を変更する際には十分注意して観察すること。	CYP2C9を介する代謝の競合阻害によると考えられている。
パロキセチン [16. 7. 5参照]	本剤の血漿中濃度が低下し、パロキセチンの血漿中濃度が上昇した。本剤の作用が減弱し、パロキセチンの作用が増強するおそれがある。	CYP2D6の阻害作用によると考えられている。
デキストロメトルフアン [16. 7. 6参照]	デキストロメトルフアンの血漿中濃度が上昇し、デキストロメトルフアンの作用が増強するおそれがある。	
制酸剤 アルミニウム製剤マグネシウム製剤 等 [16. 7. 7参照]	本剤の血漿中濃度が低下し、本剤の作用が減弱するおそれがある。	機序は明らかでない。

8. 副作用

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

(1) 重大な副作用と初期症状

11.1 重大な副作用

11.1.1 ショック、アナフィラキシー（いずれも頻度不明）

ショック、アナフィラキシー、呼吸困難、血管浮腫、血管炎、気管支痙攣等の重篤な過敏症の発現が報告されている。

11.1.2 消化性潰瘍（0.2%）、消化管出血（0.1%未満）、消化管穿孔（頻度不明）

吐血、下血（メレナ）等の症状が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。

11.1.3 心筋梗塞、脳卒中（いずれも頻度不明）
心筋梗塞、脳卒中等の重篤で場合によっては致命的な心血管系血栓塞栓性事象が報告されている。[1. 参照]
11.1.4 心不全、うっ血性心不全（いずれも頻度不明）
11.1.5 肝不全、肝炎（いずれも頻度不明）、肝機能障害（0.1%未満）、黄疸（頻度不明）
肝不全、肝炎、AST、ALT、ビリルビン等の上昇、黄疸の発現が報告されている。[8.5参照]
11.1.6 再生不良性貧血、汎血球減少症、無顆粒球症（いずれも頻度不明）
再生不良性貧血、汎血球減少症、無顆粒球症、白血球減少症、血小板減少症の発現が報告されている。
11.1.7 急性腎障害、間質性腎炎（いずれも頻度不明）
急性腎障害、間質性腎炎等の重篤な腎障害の発現が報告されている。[8.6参照]
11.1.8 中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis : TEN）、皮膚粘膜眼症候群（Stevens- Johnson症候群）、多形紅斑、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎（いずれも頻度不明）
中毒性表皮壊死融解症、皮膚粘膜眼症候群、多形紅斑、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎等の重篤で場合によっては致命的な皮膚症状の発現が報告されているので、発疹、粘膜障害もしくは他の過敏症に関連する徴候が認められた場合は直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。[8.7参照]
11.1.9 間質性肺炎（頻度不明）
咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常（捻髪音）等が認められた場合には、速やかに胸部X線、胸部CT、血清マーカー等の検査を実施すること。間質性肺炎が疑われた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

（２）その他の副作用

11.2 その他の副作用					
	5%以上	1～5%未満	0.1～1%未満	0.1%未満	頻度不明
全身			倦怠感、口渇、末梢性浮腫	悪寒、全身浮腫、疲労、ほてり、体重増加	インフルエンザ様疾
精神神経系		傾眠	頭痛、浮動性めまい、味覚異常	酩酊感、体位性めまい、感覚鈍麻、意識レベルの低下	不眠症、睡眠障害、錯乱状態、不安、幻覚、筋緊張亢進、無嗅覚
肝胆道系		ALT増加	AST増加、γ-GTP増加、Al-P増加、血中ビリルビン増加、尿ウロビ		

			リノーゲン陽性		
代謝・栄養		BUN増加	CK増加、食欲不振、LDH増加、尿糖陽性	糖尿病	血中カリウム増加、血中ナトリウム増加
消化器		腹痛、口内炎、下痢、便潜血陽性	悪心、鼓腸、消化不良、便秘、胃炎、口内乾燥、舌障害、嘔吐、口角びらん、腹部膨満、上腹部痛、胃不快感	胃腸障害、舌炎、口腔内痛、食道炎、口の感覚鈍麻、アフタ性口内炎、口腔粘膜水疱形成、心窩部不快感、胃腸炎	歯の脱落、口腔内潰瘍、嚥下障害、胃食道逆流性疾患、膵炎、憩室、過敏性腸症候群、痔出血、排便回数増加
泌尿器	$\beta 2$ -マイクログロブリン増加	NAG増加、尿潜血陽性	尿蛋白陽性	多尿、尿閉、頻尿、腎機能障害	腎結石症、良性前立腺肥大症、前立腺炎、PSA増加、血中クレアチニン増加
循環器			高血圧、潮紅、動悸	高血圧増悪、循環虚脱	不整脈、頻脈、洞性徐脈、狭心症、不安定狭心症、大動脈弁閉鎖不全症、冠動脈硬化症、心室肥大、深部静脈血栓症、血腫
呼吸器				咽頭炎、鼻出血、鼻咽頭炎	気管支炎、咳嗽、鼻炎、副鼻腔炎、呼吸困難、発声障害
皮膚		発疹	そう痒症、顔面浮腫、紅斑性皮疹、湿疹、蕁麻疹、薬疹	点状出血、斑状丘疹状皮疹、皮膚乾燥、頭部粗糠疹、多汗、皮膚炎、紅斑	斑状出血、光線過敏性反応、脱毛症、水疱性皮膚炎
感覚器			耳鳴、回転性めまい	耳痛、霧視、眼そう痒症	硝子体浮遊物、結膜出血、聴力低下
その他				背部痛、筋硬直、関節痛、四肢痛、不正子宮出血、月経障害、ウイルス感染、細菌性腸炎、頸部痛	貧血、ヘマトクリット減少、ヘモグロビン増加、真菌感染、細菌感染、ヘリコバクター感染、尿路感染、上気道感染、

					耳感染、帯状疱疹、丹毒、創傷感染、歯肉感染、迷路炎、アレルギー増悪、無菌性髄膜炎、筋痙縮、脂肪腫、ガングリオン、膣出血、乳房圧痛、卵巣嚢胞、閉経期症状、血中テストステロン減少、上顎炎、腱断裂、骨折、損傷
--	--	--	--	--	---

9. 臨床検査結果に及ぼす影響

設定されていない

10. 過量投与

設定されていない

11. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔炎等の重篤な合併症を併発することがある。

12. その他の注意

(1) 臨床使用に基づく情報

15.1 臨床使用に基づく情報

外国におけるクロスオーバー二重盲検比較試験において、本剤非投与時に比べて本剤投与時に排卵障害の割合が増加したとの報告がある。また、他の非ステロイド性消炎・鎮痛剤を長期間投与されている女性において、一時的な不妊が認められたとの報告がある。

(2) 非臨床試験に基づく情報

設定されていない

IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験

(1) 薬効薬理試験

「VI. 薬効薬理に関する項目」の項参照

(2) 安全性薬理試験

該当資料なし

(3) その他の薬理試験

該当資料なし

2. 毒性試験

(1) 単回投与毒性試験

該当資料なし

(2) 反復投与毒性試験

該当資料なし

(3) 遺伝毒性試験

該当資料なし

(4) がん原性試験

該当資料なし

(5) 生殖発生毒性試験

該当資料なし

(6) 局所刺激性試験

該当資料なし

(7) その他の特殊毒性

該当資料なし

X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分

製剤：劇薬、処方箋医薬品

原薬：劇薬

2. 有効期間

3 年

3. 包装状態での貯法

室温保存

4. 取扱い上の注意

該当しない

5. 患者向け資材

患者向医薬品ガイド：あり くすりのしおり：あり

その他の患者向資材：なし

6. 同一成分・同効薬

同一成分：セレコックス錠

同効薬：アセメタシン、インドメタシン、ジクロフェナクナトリウム、インドメタシンファルネシル、スリンダク、ナブメトン、プログルメタシンマレイン酸塩、フルフェナム酸アルミニウム、メフェナム酸、チアプロフェン酸、ロキソプロフェンナトリウム水和物、イブプロフェン、プラノプロフェン、オキサプロジン、ザルトプロフェン、ナプロキセン、フルルビプロフェン、アンピロキシカム、ピロキシカム、メロキシカム、ロルノキシカム、エトドラク、アスピリン

7. 国際誕生年月日

該当しない

8. 製造販売承認年月日及び承認番号、薬価収載年月日、販売開始年月日

	製造販売 承認年月	承認番号	薬価基準収載 年月日	販売開始 年月日
セレコキシブ錠 100 mg 「YD」	2020 年 2 月 17 日	30200AMX00387	2020 年 6 月 19 日	2020 年 6 月 19 日
セレコキシブ錠 200 mg 「YD」	2020 年 2 月 17 日	30200AMX00388	2020 年 6 月 19 日	2020 年 6 月 19 日

9. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月及びその内容

該当しない

10. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容

該当しない

11. 再審査期間

該当しない

12. 投薬期間制限に関する情報

該当しない

13. 各種コード

	厚生労働省薬価 基準収載医薬品 コード	個別医薬品 コード (YJ コード)	HOT (9 桁) 番号	レセプト電算 処理システム用 コード
セレコキシブ錠 100 mg 「YD」	1149037F1011	1149037F1062	127864401	622786401
セレコキシブ錠 200 mg 「YD」	1149037F2018	1149037F2069	127865101	622786501

14. 保険給付上の注意

本剤は診療報酬上の後発医薬品である。

X I . 文献

1. 引用文献

23. 主要文献

- 1) Sakai, M. et al. : Mol. Hum. Reprod. 2001 ; 7(6) : 595-602
- 2) Takahashi, Y. et al. : Am. J. Physiol. Regul. Integr. Comp. Physiol. 2000 ; 278(6) : R1496-1505
- 3) Knoppert, D. C. et al. : Pharmacotherapy. 2003 ; 23(1) : 97-100
- 4) Hale, T. W. et al. : J. Hum. Lact. 2004 ; 20(4) : 397-403
- 5) 藤田雅己 他 : Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2960-2969
- 6) 松岡治 他 : Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2970-2976
- 7) 松岡治 他 : Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2977-2987
- 8) 関節リウマチ及び変形性膝関節症患者・薬物動態（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.2.3.8）
- 9) (株)陽進堂社内資料：生物学的同等性試験（錠 100mg）
- 10) (株)陽進堂社内資料：生物学的同等性試験（錠 200mg）
- 11) Paulson, S. K. et al. : Biopharm. Drug Dispos. 1999 ; 20(6) : 293-299
- 12) Tang, C. et al. : J. Pharmacol. Exp. Ther. 2000 ; 293(2) : 453-459
- 13) 海外健康成人・代謝及び薬物相互作用（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.2.2.3.1.1）
- 14) Nasu, K. et al. : Pharmacogenetics. 1997 ; 7(5) : 405-409
- 15) 健康成人・代謝（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.2.3.2.6）
- 16) Kirchheiner, J. et al. : Pharmacogenetics. 2003 ; 13(8) : 473-480
- 17) Lundblad, M. S. et al. : Clin. Pharmacol. Ther. 2006 ; 79(3) : 287-288
- 18) Paulson, S. K. et al. : Drug Metab. Dispos. 2000 ; 28(3) : 308-314
- 19) マスバランス試験（外国）（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.1.2）
- 20) 海外腎障害患者・薬物動態（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.6.17）
- 21) 肝障害患者・薬物動態（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.2.2.2.2）
- 22) 海外健康成人・薬物動態（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.6.15）
- 23) 海外健康成人・薬物相互作用（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.6.20）
- 24) 海外健康成人・薬物相互作用（セレコックス錠：2007年1月26日承認、申請資料概要 2.7.6.27）
- 25) Karim, A. et al. : J. Clin. Pharmacol. 2000 ; 40 (6) : 655-663

- 26) 海外健康成人・薬物相互作用（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.6.30)
- 27) 海外健康成人・薬物相互作用（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.6.31)
- 28) 海外健康成人・薬物相互作用（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.6.28)
- 29) 海外健康成人・薬物相互作用（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.6.25)
- 30) 安倍達 他：Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2788-2819
- 31) 安倍達 他：Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2820-2845
- 32) 青木虎吉 他：Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2869-2910
- 33) 菅原幸子：Prog. Med. 2006 ; 26(Suppl. 3) : 2911-2931
- 34) 菊地臣一 他：Prog. Med. 2009 ; 29(Suppl. 2) : 2853-2872
- 35) 高岸憲二 他：Prog. Med. 2009 ; 29(Suppl. 2) : 2893-2917
- 36) 高岸憲二 他：Prog. Med. 2009 ; 29(Suppl. 2) : 2918-2940
- 37) 荻野利彦 他：Prog. Med. 2009 ; 29(Suppl. 2) : 2941-2963
- 38) 国内第Ⅲ相試験（セレコックス錠：2011 年 12 月 22 日承認、審査報告書）
- 39) 太田博嘉 他：Prog. Med. 2010 ; 30(12) : 3117-3130
- 40) 代田達夫 他：歯科薬物療法. 2001 ; 20(3) : 154- 172
- 41) 抜歯後疼痛追加投与試験（セレコックス錠：2011 年 12 月 22 日承認、審査報告書）
- 42) RA に対する第Ⅲ相試験（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.6.34)
- 43) OA に対する第Ⅲ相試験（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.6.36)
- 44) 心血管系に関する有害事象（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.7.4.2)
- 45) 心血管系有害事象について（セレコックス錠：2009 年 6 月 17 日承認、審査報告書）
- 46) 国内第Ⅱ相試験（セレコックス錠：2011 年 12 月 22 日承認、審査報告書）
- 47) 製造販売後臨床試験（セレコックス錠：2020 年 3 月 18 日公表、再審査報告書）
- 48) Bertagnolli, M. M. et al. : N. Engl. J. Med. 2006 ; 355(9) : 873-884
- 49) Arber, N. et al. : N. Engl. J. Med. 2006 ; 355(9) : 885-895
- 50) Solomon, S. D. et al. : Circulation. 2006 ; 114 (10) : 1028-1035
- 51) Penning, T. D. et al. : J. Med. Chem. 1997 ; 40 (9) : 1347-1365
- 52) Yoshino, T. et al. : Arzneimittel-Forschung/Drug Res. 2005 ; 55(7) : 394-402
- 53) 作用機序（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.6.2.6)
- 54) Noguchi, M. et al. : Eur. J. Pharmacol. 2005 ; 513 (3) : 229-235
- 55) 抗炎症作用（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.6.2.2)
- 56) 鎮痛作用（セレコックス錠：2007 年 1 月 26 日承認、申請資料概要 2.6.2.2)

- 57) 厚生省薬務局：医薬品副作用情報 No. 98, 1989 58) Yoshino, T. et al. : Eur. J. Pharmacol. 2005 ; 507 (1-3) : 69-76
- 58) (株)陽進堂社内資料：安定性資料

2. その他の文献

該当資料なし

X II . 参考資料

1. 主な外国での発売状況

該当しない

2. 海外における臨床支援情報

該当しない

XⅢ. 備考

1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報

(1) 粉碎

個別に照会すること。

照会先：お客様相談室 0120 - 647 - 734

(2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性

個別に照会すること。

照会先：お客様相談室 0120 - 647 - 734

2. その他の関連資料

該当資料なし

